

令和6年度「心の輪を広げる体験作文」京都市入賞作品

最優秀賞 全部門で該当作品なし

中学生部門 優秀賞 「魔法の言葉」 常泉 初音 (市立加茂川中学校)

私が障害を持つ人と初めて出会ったのは小学校低学年のときでした。母の知り合いの娘のMちゃんです。Mちゃんは発達障害でした。当時の私はMちゃんが発達障害とは知らず、仲良くしてくれるお姉さんと思っただけでした。

ですが、自分が成長していくにつれてMちゃんを年下のようを感じるようになってきました。そのことを疑問に思い、母に尋ねてみると、母は「Mちゃんは発達障害なんだよ」と教えてくれました。障害についてあまり知らずに生きてきた私にとってそれは耳にしたこととはあっても、詳しい意味を知らない言葉でした。母のそんな言葉に続き「発達障害って何？」と尋ねると、母は「生まれつき脳に異常のある人のことだよ。Mちゃんは年齢より少し脳の発達が遅いんだよ」と教えてくれました。

そんなある日、Mちゃんと会って遊ぶ機会がありました。そこでMちゃんにあまり聞かれたくないことについてしつこく聞かれ、Mちゃんに対して強く当たってしまう出来事がありました。私はやってしまった、でもしつこく聞いてきたMちゃんも悪いと思いました。しかしMちゃんはすぐに私に「ごめんね」と謝ってくれました。Mちゃんに謝られて、「私もごめん」と返しました。私はMちゃんの言った「ごめんね」という言葉が引っかかっていました。

私はMちゃんに謝られてはっとしました。昔から母に「ありがとうとごめんなさいを必ず言える人になってね」と言われていたことを思い出しました。母は私に「Mちゃんは少し脳の発達が遅いんだよ」と言っており、私もMちゃんに少し子どもっぽいところがあると感じていました。しかし実際は人のせいにする私の方がまだまだ子供で、ちゃんと自分の過ちと認めて謝れるMちゃんの方が大人だと私は思いました。

母は何故私に「ありがとうとごめんなさいの言える人間になってね」と言っていたのか、私はそこで気が付きました。ありがとうやごめんなさいは、人と関わり、支え合って生きていく上で必ず必要だからです。それは障害者だろうと健常者だろうと関係ない、みんなが使える魔法の言葉だからです。

私はそんな魔法の言葉を絶対忘れないと今も心に誓っています。

私は最近手話を勉強している。

私が手話を覚えようと思ったきっかけは、あるアニメだった。高一の終わり頃だった。今年の春にやっていたとあるアニメにハマっていた。主人公は聴覚障がい者で、その子の大学生活、恋愛が描かれているマンガ原作アニメだ。

手話を覚えようと思ったのはこのときが初めてではなかった。

中学生の頃に少しだけ手話にふれたことがあった。友達の影響ではじめたことで、友達が、指文字や手話のクイズをよく一緒に帰るときにしてくれていたのがきっかけで、家で家族に話したら父が昔手話を勉強していたらしく、少し教えてもらった程度だった。

それからこのアニメを見るまでは手話のことは忘れていたくらいだった。

手話を覚えようと思い、高校の図書館で手話の本を借りた。あいさつのしかた、名前や指文字などを覚えようと思った。

母の知り合いから聴覚障がい者のグループにさそってもらい、参加するようになった。最初の方は母と行ったり父と行ったりしていたが最近は一人行っている。この会は月に一回開かれる十人程度の総会。

最初行ったときは、私はろう者の方との交流などはしたことがなかったので不安だった。しかし、みなさん温かく接してくださり、心優しい方々ばかりだった。そこにいる全員がろう者というわけではなく、色々な方が集まっていて、聴者の人もろう者の人もいた。

私が手話に関する質問をすると、みなさん真剣に考えてくださった。地域や世代によって手話のやり方が異なり、ひとつの言葉に対して色々な表現があって面白いなと感じた。

手話は目で見る言語だから、聴者の人と話すときは目を見なくてもいいけど、目を見て話す必要があるのが何だか緊張するなと思った。

その会が終わったあと、何人かでお話をした。私はまだわからない手話がたくさんあって話せるか不安だったけれど、意外と伝わって楽しく話すことができた。ジェスチャーに近いところもあって、その方は上手に話しておられたけれど、声が聴こえていなくても会話ができる、これを実感した。

音が聴こえなくても、それ以外自分と何も変わらないんだなと思った。それまでは、何となく、音が聴こえないのがかわいそうだったり、耳が不自由なのが不憫だと思ったりしていた自分がいたかもしれない。でもそうじゃないと気づけた。

あるテレビ番組で、「羽がついていたら便利だね。でも今の自分に羽がないからといって不便じゃないよね。私たちも同じ。元々聴こえないから不便だとは思わない。」といったインタビューのことを、ろう者の方とその旦那さんが語られていて、その通りだなと思った。

また、アニメで主人公の先輩が、聴覚障がい者である主人公のことを透明だと言っていた。私は会の人たちと会ってその言葉にすっかりきた。心が綺麗なんだろうなとその人たちと関わってきて思った。

会の人の中には父との知り合いの方もいて何だかすごく縁を感じた。

会の人と何人か話をして共通して教えてくださったこと、それは積極的に行動することだった。自分から声をかけたり、自分から行動することが大切だと教えてもらった。手話をもっと広まって、障がいのある、ないに関係なくして気軽に会話できるような社会になればいいと思う。そのためにも自分をもっと手話を勉強したり、積極的に行動したりしていこうと思う。

一般部門

優秀賞

「出会い」 谷口 博

何故君はどうして、そんなに急がなくてはならなかったのか。せっかく友人になれたのに。君はまだ九歳。短すぎる。人生が……。まだまだ友人でいたかったのに。君は僕より一歳年上のお兄さん。君には二歳年下の、弟君がいた。弟君に紹介されて、僕は君の存在を知ることになった。

君は哺乳瓶と流動食を口にして、食事。君との出会いから、君の姿、存在が八歳の脳裡に刷り込まれたのです。君と僕とは生きる世界が異なりますが、今日も君は心の輪となり、少年期の頃に戻るのです。

僕の生活年齢は七十四歳ですが、心の年齢は八歳。君、いやお兄ちゃんは、今日もくよくよしている僕に、今パソコンに向かっている僕に、文字を綴る度に力を貸してくれます。

僕は六十四歳の時、脳出血を患いました。年齢の高齢化もあり、フレイルが加速してきました。視野狭窄と指のしびれが、同時にやってきて、文章家するのにも、邪魔をします。歩行も不安定になってきましたが、いつも寄り添ってくれます。

お兄ちゃんが手を添え、力をかしてくれます。これは、お兄ちゃんの、「心」が僕の「心」と一体となって行く過程なのです。白い用紙にパソコンのマウスが、一字一字埋めていく。目には見えませんが、文字を検索する手に手を重ね、僕の心寄り添ってくれます。

心使いが、伝わってきます。心の温もりが伝わってきます。心に小さな輪が広がったのです。

それは、まるで僕の心が見透かされているような、心遣いです。

僕はそのように理解することにしました。何しろ、彼の存在を知る人は、同じ地区でもほとんどいなかった。増して、無責任なヘイトがあった。憎悪、反感、陰悪等を意味しますが、それは何を指すのか。

古い辞書にも載っていません。農村だったこともあり、封建的色彩の濃い山村地域社会だった。

お兄ちゃんとの出会いは、心と心の出会いでした。今は心の脳裡に、確かに存在し、生命が躍動しています。

お兄ちゃん家族は、在日外国人でした。まだ、国も地域も排他的な時代で、自らも重症心身障害児として、医療と福祉を大きなニーズとしながら、この世に誕生したのでした。在宅福祉、在宅医療の不十分さを一律に呈し、重症心身障害児に、家族と共に苦しみ、誹謗中傷に耐え、一緒に涙を流すことができなかつたことを、悔やまれて、悔やまれて、なりません。しかし、お兄ちゃんは、そんな僕を恨むことなく、姿こそ見えませんが、僕の心に寄り添ってくれ、惜しみなく力を与えてくれるのです。夢と希望を与えてくれるのです。

夢と希望の内容は、①不登校の解消②消極的な性格を、積極的にしてくれたことでした。具体的には、一般高校を不合格になった僕を、定時制高校の門を開いてくれたこと。これが後に福祉の道を志す基礎、土台として提供してくれたこと。

希望道は、お兄ちゃんとの出会いが、僕にとって、何を意味するのか。僕はお兄ちゃんの存在に運命的なものを感じたのです。心に寄り添う資格があるのか。

通信制大学で社会福祉学科を開設していた大学で学びました。入学はしていたものの、レポート提出とスクーリング、テキスト学習が中心で、オリエンテーションでは、四年間で卒業する者はわずか十パーセントとの説明を受け、十九歳で大学生になりました。しかし、僕の志を裏切るような一大事が起きたのです。それを報じる新聞記事は、僕より一学年下の生徒募集を最後に母校の定時制高校が廃校になると報じていました。ビックリ、仰天した瞬間でした。教員、生徒、関係者が一丸に反対、存続の陳情をしましたが、変更させることができず、生徒側から見れば、一方的に廃校されたのです。

一学年下の生徒が最後の卒業生になりました。母校の歴史は、閉じられたのです。

ここで挫ける訳にはいけません、それはお兄ちゃんと僕との間での「福祉」の心を共有していたからです

二人の自称兄弟の心は、永遠不滅なのですから。僕たちはキーワードとして、障害児・者福祉、社会福祉を「心」で共有したのですから。福祉と平和の輪を広げたい。

お兄ちゃんと僕とは、二人の心は一つです。でも福祉の現場はそれぞれ固有の理念をもっています。

僕には、業務遂行だけでなく、各々の心よりも優先し、業務でなく、お兄ちゃんとの、心の約束を忘れ去ろうとしている自分が許せなくなり、アルバイトしながら大学院で学び直しました。叩けばほこりがでる体。心の輪に加えてくれますか。

敬具

追伸 九歳のお兄ちゃんへ
七十四歳の弟より